南小出南原遺跡

——緊急発掘調査報告書——

1978

伊那市教育委員会
タカノ株式会社

南小出南原遺跡

——緊急発掘調査報告書——

1978

伊那市教育委査会
タカノ株式会社

序

中央高速自動車道工事は西春近地区においては昭和48年度に着手しました。自動車道をつくるおりには，その設計図によって，土盛や削る方法がとられてきました。その折りに，土が不足する事態が生じ，急遽，それを補足するために，土取りの候補地として，南小出の地があげられました。この地区は以前よりタカノ株式会社が用地買収をしていたために，その発掘費用を文化財保護法に基づき，会社側で全面負担をしていただきました。

発掘調査は友野団長，根津，御子柴両副団長をはじめ,合わせて７名の調査員をお願いし，西春近，東春近の地元の熟練した作業員達によって昭和49年４月29日から昭和49年５月31日にかけて発掘作業が行なわれました。その成果は方形周溝墓という伊那市では初めての遺構が発見されました。

この報告書は以上の調査をふまえて，調査員各位の苦心と努力によってできあがり，南小出南原遺跡の姿が解明されました。特に発掘調査に全面的に協力され，この報告書を見ずに他界された，松沢一美前教育長，坪木健一前市会議員，辰野伝衛前文化財審議委員各位に対し安らかに眠られますよう祈念するものであります。

刊行にあたり，友野団長はじめ，御尽力いただいた調査員各位及び，発掘作業員の方々に対して，心から感謝申しあげる次第であります。

昭和５３年７月３日

伊那市教育委員会

教育長　伊　沢　一　雄

はしがき

中央道開通工事に伴なって，その埋土が必要となってきました。ちょうどその時，我社の買収した土地がその対象となってきたので，我社でもこころよくひきうけることにしました。

この地がちょうど南小出南原遺跡に該当するとのことで，発掘調査にとりかかることにしました。費用の点については文化財保護法にもとづき受益者負担というかたちをとりました。

発掘調査は４月下旬から５月中旬にかけて行なわれ，若葉のおいしげる気候の最もなごやかな時期でした。

その成果は報告書に記載された通り住居址２軒，方形周溝墓１，土坑２，配石址，堀址，柱穴群でありました。

終始，この発掘に御協力，御援助下さった工事関係者（戸田建設）伊那市教育委員会，団長友野良一先生，各調査員，考古学会員の方々に深甚の謝意を捧げる次第であります。

最後に，この報告書が今後の研究に貢献できますよう期待する次第であります。

昭和５３年７月１０日

タカノ株式会社

社長　鷹野忠良

凡　　例

1.　今回の発掘調査は工場誘致事業に伴なう，土取り工事にもとづく報告書とする。

2.　この調査は，工場誘致に伴なう緊急発掘で，発掘はタカノ株式会社の委託により，伊那市教育委員会が実施した。

3.　この調査の費用は文化財保護法の規定に基づいて，受益者負担という形式を採り入れて，全面的にタカノ株式会社が負担した。

4.　本調査は，至急に業務を終了する義務があるため，報告書は図版を主体として文章記述もできるだけ簡略にし，資料の再検討は，後日の機会にゆずることにした。

5.　本文執筆者は，次のとおりである。担当した項目の末尾に氏名を記した。

小池政美，

◎図版作製者

- 遺構および地形

友野良一，小池政美

- 遺物実測図

田畑辰雄

◎写真撮影

- 発掘及び遺構

友野良一，小池政美

6.　本報告書の編集は主として，伊那市教育委員会があたった。

表紙写真

左上　掘址

右下　方形周溝墓

目　　次

序
はしがき
凡　例
目　次
挿図目次
図版目次

第Ⅰ章　環　　境 …… (1～2)

第1節　位　　置 …… (1)
第2節　地形・地質 …… (2)
第3節　歴史的環境 …… (2)

第Ⅱ章　発掘調査の経過 …… (3～7)

第1節　発掘調査の経緯 …… (3)
第2節　調査の組織 …… (3～4)
第3節　発掘日誌 …… (4～7)

第Ⅲ章　遺　　構 …… (8～18)

第1節　住 居 址 …… (11～12)
第2節　方形周溝墓 …… (12～13)
第3節　土　　坑 …… (14)
第4節　配 石 址 …… (14～16)
第5節　堀　　址 …… (17)
第6節　柱 穴 群 …… (18)

第Ⅳ章　遺　　物 …… (19～21)

第1節　第2号住居址出土土器 …… (19～20)
第2節　石　　器 …… (20～21)

第Ⅴ章　ま と め …… (21～22)

挿　図　目　次

第１図　位置及び西春近地区遺跡分布図 …… (１)
第２図　地形図及び遺構配置図 …… (８)
第３図　第１号住居址実測図 …… (11)
第４図　第２号住居址実測図 …… (12)
第５図　第１号方形周溝墓実測図 …… (13)
第６図　第１号土坑実測図 …… (14)
第７図　第２号土坑実測図 …… (14)
第８図　第１号配石址実測図 …… (15)
第９図　第１号堀址実測図 …… (15)
第10図　第１号柱穴群実測図 …… (18)
第11図　第２号住居址出土土器実測図 …… (19)
第12図　石器実測図 …… (21)

図　版　目　次

図版１　遺跡全景
図版２　遺　　構（住居址及び土坑）
図版３　遺　　構（方形周溝墓及び配石址）
図版４　遺　　構（堀址及び柱穴群）
図版５　遺物出土状況

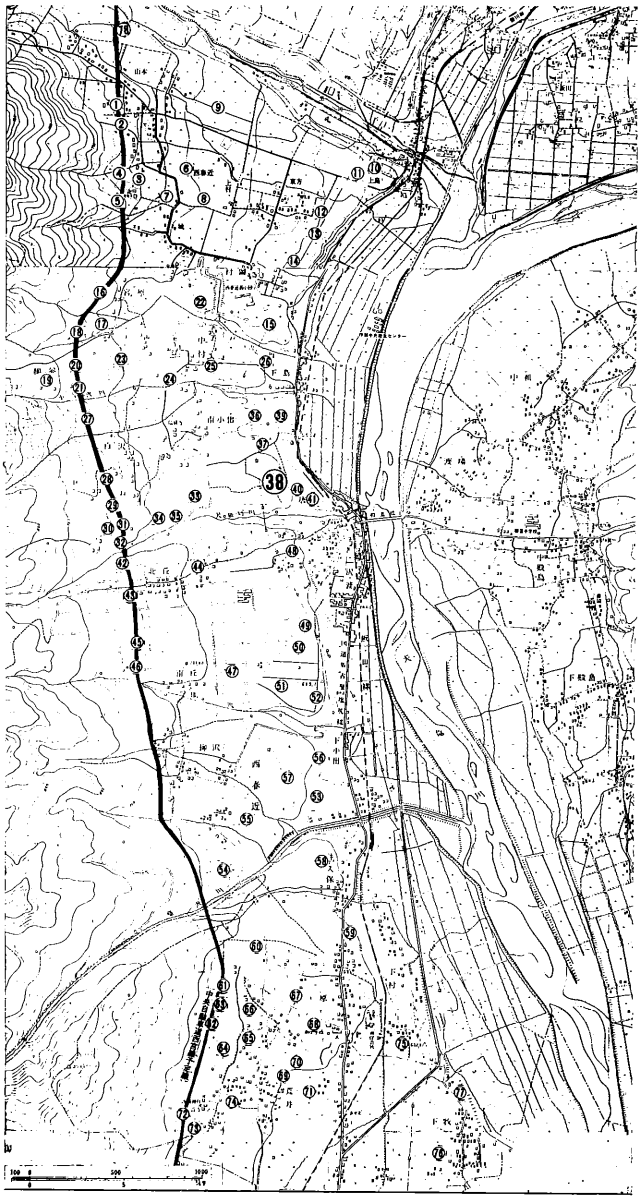
第Ⅰ章　環　　境

第1節　位　　置

南小出南原遺跡は，長野県伊那市西春近南小出地区に所在している。遺跡地までの道順は，飯田線下島駅で降り，信盛寺と名の記してある鳥居をくぐって，西方へ 500m程坂を登って平坦となった地点で南側にみえる第二段丘面が遺跡地であり，当地は犬田切川の北側に該当している。

遺跡の名称

1	城平上	40	唐木原
2	城　平	41	唐木古墳
3	常輪寺	42	北丘B
4	宮　林	43	北丘A
5	山の根	44	北丘C
6	山　本	45	南丘B
7	常輪寺下	46	南丘A
8	上　村	47	南丘C
9	北　条	48	眼子田原
10	上島下	49	山の神
11	上　島	50	上の塚
12	東方B	51	沢渡南原
13	東方A	52	下小出原
14	村岡北	53	天伯原
15	村岡南	54	南　村
16	大　境	55	東　田
17	中　原	56	天　伯
18	百駄刈	57	下小出原
19	西垣外	58	井の久保
20	細ケ谷A	59	表木原
21	細ケ谷B	60	山の下
22	小出城	61	菖浦沢
23	宮ノ原	62	富士山下
24	浜射場	63	富士塚
25	中　村	64	広垣外1
26	中村東	65	広垣外2
27	山寺垣外	66	鳥井田
28	白沢原	67	高遠道
29	名　廻	68	西春近南小学校附近
30	名廻西古墳	69	安岡城
31	名廻東古墳	70	城の腰
32	名廻南	71	横　吹
33	児　塚	72	和　手
34	鎮護塚西古墳	73	上手南
35	鎮護塚東古墳	74	宮入口
36	カンバ垣外	75	寺　村
37	丸　山	76	下　牧
38	**南小出南原**	77	下牧経塚
39	薬師堂		



第1図　位置及び西春近地区遺跡分布図

第２節　地形・地質

伊那谷に共通する全般的な地形は，西に木曽山脈（中央アルプス），東に赤石山脈（南アルプス）とその前山となっている伊那山脈とにはさまれた状態で，南北に縞状に伸びている。これらの山脈の最も低い地帯に天竜川が南へと流れている。この天竜川は諏訪湖に源を成し，延々と二百数十kmを流れて，太平洋へと流れ込んでいる。流れ込むまえまでには各所で蛇行し，水量にも変化がある。また，両岸には数段にわたって河岸段丘や複合扇状地が発達し，伊那谷独特の段丘を成している。

当遺跡地の存在する長野県伊那市西春近南小出地籍は，西は権現山塊（1,749ｍ）をまともに仰ぎ見るのが可能である。南側は犬田切川が西から東へ流れ，各種の花崗岩礫層の上にローム層が堆積している。

第３節　歴史的環境

伊那市西春近地区は西から東へ流れて，天竜川と合流する多くの支流が存在し，これらの小河川の両岸には，微高状の河岸段丘が発達している。このような自然的条件に恵まれているために，多くの遺跡が認められ，現在，確認されたので78カ所に及んでいる。このなかでは時代別には，単独のもの，また幾時代にもわたって複合しているもの等多種多様である。また，最近，注目されだした中世時代の城としては，山本の城・小出城・あら城・内城・丸山・物見や城・表木城・安岡城等であり，これらの城郭遺構を取り囲く，館の存在性も明らかとなってきた。

ここで，各時代の代表的な遺跡を第１図より列記してみると次のようになる。縄文早期時代の遺跡としては，㉑細ケ谷Ｂ，⑱百駄刈，㉝児塚，⑤山の根，縄文前期としては，⑩上島下，⑪上島，縄文中期としては，㊷北丘Ｂ，⑦常輪寺下，縄文後期としては，⑱百駄刈，⑰中原，㊷北丘Ｂ，縄文晩期としては，②城平，⑤山の根，⑯大境，⑱百駄刈，㉑細ケ谷Ｂ，㊶菖蒲沢，弥生時代後期としては，⑤山の根，⑥山本，⑧上村，㊻南丘Ａ，㊷富士山下，㊾安岡城，㊿城の腰，(71)横吹，(72)和手，(73)上手南，土師器としては城平上，城平，山の根，常輪寺下，上島，大境，百駄刈，細ケ谷Ｂ，中村東，白沢原，名廻，名廻東古墳，名廻南，児塚，鎮護塚東古墳，南小出南原，薬師堂，唐木原，唐木古墳，北丘Ａ，南丘Ｂ，南丘Ａ，山の神，上の塚，下小出原，天伯原，表木原，菖蒲沢，富士山下，富士塚，広垣外１，広垣外２，鳥井田，高遠道，西春近南小学校附近，安岡城，城の腰，横吹，和手，宮入口，寺村，須恵器としては，城平上，城平，山の根，常輪寺下，北条，上島，大境百駄刈，細ケ谷Ｂ，白沢原，名廻，名廻東古墳，カンバ垣外，南小出南原，薬師堂，唐木原，唐木古墳，南丘Ａ，上の塚，天伯原，表木原，菖蒲沢，富士山下，富士塚，広垣外１，広垣外２，鳥井田，高遠道，安岡城，城の腰，横吹，和手，上手南，宮入口，寺村，灰釉陶器としては，天狗上，城平上，城平，山の根，上島，大境，百駄刈，白沢原，名廻，名廻南，カンバ垣外，南小出南原，薬師堂，唐木原，南丘Ａ，天伯原，東田，下小出原，表木原，菖蒲沢，広垣外２，鳥井田，高遠道安岡城，和手，山王であった。

（小池政美）

第Ⅱ章　発掘調査の経過

第１節　発掘調査の経緯

南小出南原遺跡は，昭和45年２月下旬に実施した，伊那西部地区遺跡分布調査の際に発見された遺跡である。この度，この遺跡地の一隅をタカノ株式会社が買収し，この地に，工場従業員宿舎を建設するとの計画が，これと同時に，ときあたかも，中央道開通工事が盛んに行なわれていた。この工事の埋土に当計画地の土を取っていくという計画，これらの二つの計画が伊那市役所開発課を通して，市教育委員会へ通達があった。そこで，市教育委員会は，文化財保護法に基づいて，発掘調査費をタカノ株式会社におってもらった。さらに，市教育委員会は発掘調査着工後に，問題が起きないように，市教育委員会，市企画課，中央道開係業者戸田建設，タカノ株式会社の四者で，昭和49年４月24日，市役所第３会議室にて，綿密なる打合せ会を開催する。その後，市教育委員会はただちに，発掘準備をして，４月29日より発掘調査にとりかかった。

第２節　調査の組織

南小出南原遺跡発掘調査会

調査委員会

委員長	松沢一美	伊那市教育委員会教育長	
副委員長	福沢総一郎	伊那市文化財審議委員会委員長	
委員	坂井喜夫	伊那市教育委員長	
〃	向山雅重	長野県文化財専門委員	
〃	木下　衛	上伊那教育会会長	
〃	辰野伝衛	伊那市文化財審議委員	
〃	坪木健一	伊那市市会議員	
調査事務局	浦野孝之	伊那市教育委員会社会教育課長	
〃	保坂九市	〃	課長補佐
〃	中村幸子	〃	主事
〃	小池政美	〃	主事

発掘調査団

団長	友野良一	日本考古学協会会員
副団長	根津清志	長野県考古学会会員
〃	御子柴泰正	〃
調査員	小池政美	〃
〃	田畑辰雄	〃

調　査　員　　辰野伝衛　　長野県考古学会会員
〃　　福沢幸一　　〃

第３節　発掘日誌

昭和49年４月29日，本日は天皇誕生日で，国民の祝日と決められているが，我々は日程の都合により，休んではいられない。午前８時30分，団長・調査員・作業員が集合し，団長からの諸注意を聞き，９時より作業にとりかかる。まず，テント張りより実施した。中央道遺跡発掘のベテラン調査員の適切な指導により，１時間程で目印と休息地となる幕舎が完備できた。発掘地点は荒地となっており，雑草が背丈程の高さで，青々と繁い茂げっていた。これらは作業進行上支障があるので刈り取って，数カ所に集め，焼き払うことにする。これらの作業を午後２時頃までかかって完遂する。お茶を飲んだ後，グリット設定をする。グリットの名称は中央道方式を採用した。その内容は南から北へ，Ｙ地区・Ａ地区・Ｂ地区とし，それらの地区をそれぞれＫ～Ｙ，Ａ～Ｙ，Ａ～Ｙとし中心線を50とし，西へ行くほど数を減少し，東へ行くほどそれを増していく。

昭和49年４月30日，グリット設定地の南側より掘り始める。本遺跡地の存在する地形は天竜川によって形成された河岸段丘の第２段丘面にあるので，一望のもとに，南アルプスの連山，天竜川の蛇行した流れが，くっきりと目に映える。遺物は土器片が数片出土した。

昭和49年５月１日，本日もグリット掘りを進める。層位は耕作土が30cm，褐色土が10cm程のそれぞれの厚みを有し，表土面より40cm程でローム層に達する。桑根の跡，あるいは長芋を掘り出した跡が鮮明に認められ，攪乱の跡が生々しかった。したがって，仮に，遺構があったとしても，残存している可能性は希薄であると思われた。本日も遺物は数片出土したのみで，遺構は検出されなかった。

昭和49年５月２日，Ａ地区Ｃ47～Ｈ47，Ａ地区Ｃ43～Ｆ47の範囲内で，径や辺の一定した丸型や角型の柱穴が検出され，そのなかには石の入れてあるのもみられた。また柱穴の底部や側壁は堅くたたかれており，明らかに人の手が加わったと思

発　掘　風　景

われる。配列も大般，等間隔で，しかも一直線上に並ぶのが多い。残念ながら，柱穴群よりは遺物は1片も出土せず，時代決定に困難である。遺物は他のグリットより数片出土したのみである。

昭和49年5月3日，本日は国民の祝日で休息日であるべきだが，都合により作業を実施する。五月晴れで青々とした空に鯉のぼりが泳いでいた。柱穴群の完掘と清掃を終了する。遺物の出土が極めて少ないので，買収用地の西側によった桑畑のなかにところどころグリットを設け，掘り下げてみると，A地区O 37に落ち込みがあり，その周辺は攪乱が著しいので，思いきって掘り下げてみると，堅くたたかれており，焼土も検出されたので，遺構に相違ないと判断でき，第1号住居址とする。A地区W34に一抱え程の石が点在していた。遺跡地の周辺には白沢古墳群，唐木古墳等の後期群集墳があるので，もしかしたら，それになるのではないかという希望を抱きつつ，作業続行。

発　掘　風　景

昭和49年5月4日，第1号住居址のプラン確認と，古墳の疑がいのある石の範囲をつきとめるために，一日中かかって表土除土をする。皆，黙々と，一輪車を押している。夕刻近くになって，ジョレン，草かきでかいてみると，第1号住居址のプラン確認ができ，また，石は古墳ではなくて，単なる配石で，第1号配石と名付ける。期待していた夢が消え去り，家路への足どりもなんとなく重く感じられた。

昭和49年5月7日，第1号住居址の掘り下げを実施する。それによると柱穴は壁の外側に存在していた。第1号住居址の東側に石を有する落ち込みがあり，これを第1号土坑とした。さらに，配石の広がりをつきとめようと精心した。

昭和49年5月8日，第1号住居址の完掘，第1号土坑の完掘，ならびに，両遺構の清掃を終了する。配石に充満していた黒土をとりのぞきつつ掘り下げを実施する。石の間からは何も出土しなかった。石のなかには焼けていたものも存在していたが，時代決定になりうる遺物はまだ出土しなかった。配石の完掘をし，清掃を終了する。午後より遺跡地の最北端に一列状にグリットを入れてみ

るが，遺物は発見されず，この地区での調査を断つ。お茶過ぎに道路の南側，用地の西端の地区にグリットを入れてみると，落ち込みがあり，第２号住居址とした。

昭和49年５月10日，第２号住居址のプラン確認と新らたな遺構検出に力を傾むける。それによると第２号住居址は隅丸方形プランの住居址であった。午後より，掘り下げを開始してみると，覆土中より須恵器，土師器が出土し，住居址の時代決定が明瞭となってきた。

昭和49年５月11日，第２住居址の掘り下げをしていくと，住居址の全体の姿が一つ，一つ，明らかとなってきた。遺物は土師器や須恵器の完型品に近い坏や甕が出土し，本址は奈良時代であると決定できた。

発掘風景

床面まで掘り下げてみると，北東の隅に弧状の黒々とした落ち込みがみられた周辺を追求してみると，延々と続き，しかも，丸くなっている模様であった。脳裏に古墳ではないかというひらめきが一瞬，浮んだが本日のところでは，海の者とも，山の者ともわからなかった。明日になれば，どうにか判断できるのではないか。

昭和49年５月13日，第２号住居址の完掘をし，清掃を終了する。本址の極だった特徴は柱穴が壁外に回っていることであった。昨日，検出された不明の遺構の実態を追求しつづける。遺構の占める面積と思われるうちの半分を掘り下げてみたが，現時点では古墳とは言い切れない。

昭和49年５月14日，実態のわからぬ遺構のプラン確認に重点を置いて仕事を進める。作業は排土した土をまた排土するような事態となり，極めて不都合な状態が生じてきた。午前中一杯かかってプランの確認をした。それによれば，直径は８ｍ程を測定でき，周構がぐるりと回わっていた。主体部と思われる部分は桑の攪乱がはなはだしくて，主体部検出への望みは断れたかっこうであった午後より，周溝掘りを開始した。決め手になり得る遺物は検出されなかった。この遺構を，一応，第１号方形周溝墓としてとらえた。

昭和49年５月16日，昨日は一日中雨降りであった。遺構には雨がたまり，仕事ができない状態だったので，遺跡地の最北端にグリットを入れてみる。グリットをいれた主たる理由は，沢をへだてた北側は城郭が残存しているので，もしかすると，それに関連する遺構が検出できるかという期待をもっていた。調査を進めていくと，東側のグリットに我々の期待していた遺構が検出され，掘り

下げてみると，まさしくこれは堀に相違ないことが判明し，あまりにも命中率が良好なので，一瞬おそろしい感じがした。

昭和49年５月17日，午前中は柱穴群，第１号住居址，第１号土坑，第１号配石，第２号住居址の清掃，午後は前述した各々の遺構の写真撮影，方形周溝墓の掘り下げを実施する。主体部を検出しようと一層，一層，掘り下げていくが，今日のところ，それらしきものは確認できず，いらいらした気持がみられた。

昭和49年５月18日，第１号住居址，第１号土坑，第１号柱穴群の実測。

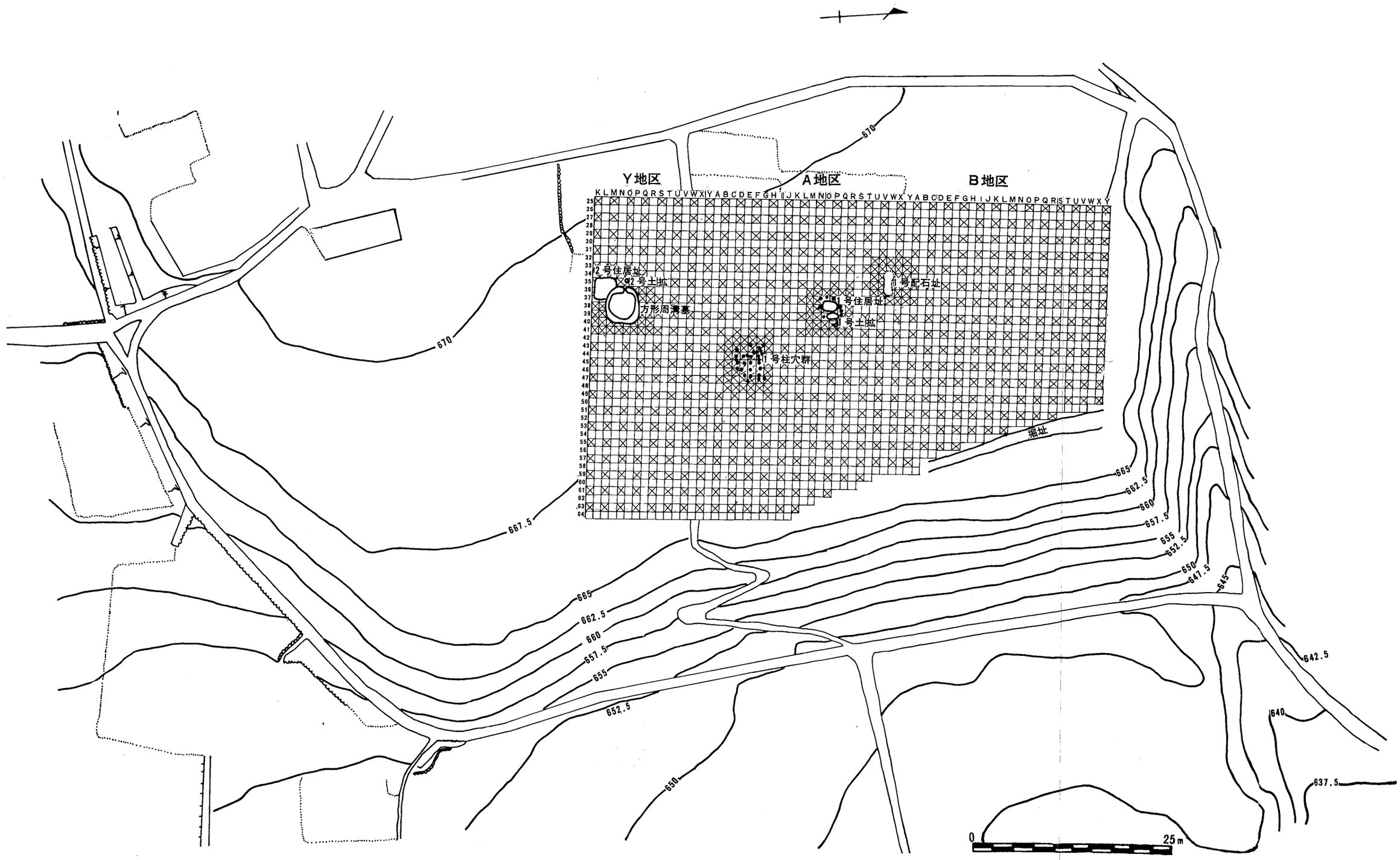
昭和49年５月20日，堀のプランを確認する。

昭和49年５月22～28日，堀の掘り下げを実施する。

昭和49年５月29日，堀と方形周溝墓の清掃並びに写真撮影。

昭和49年５月30日，柱穴群，方形周溝墓，第２号住居址の実測。

昭和49年５月31日，堀と第１号集石，配石，第１号土坑の実測，全測図の作製。　（小池政美）



第２図　地形図及び遺構配置図

第1節　住　居　址

第1号住居址　（第3図，図版2）

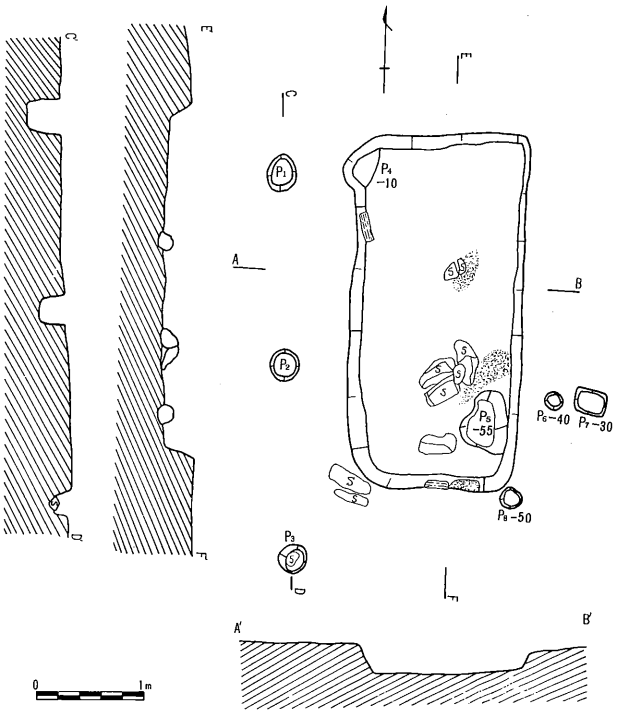
本住居址は表土面より40cm位下ったローム層面を掘り込み，南北3m30cm，東西1m60cm程の方形プランの竪穴住居址であった。壁高は南側で28cm，北側で23cm，西側27cm，東側で15cm位であった。壁面は内傾気味で，叩きらしきものはなくて，段が付き，破壊しやすくなっている。床面はわずかな叩きであるが，わずかに凹凸はあるが，桑の攪乱によって大部分は破壊されてしまっている。南壁の炭化物は屋根に使用された茅である。床面上の各所に焼土の堆積がみられ，火災にあったことを推知できうる。柱穴は西側に等間隔状に直線的に配列されてあり，その柱穴内には石が入っている。遺物の出土は何もなかった。ただ，かっこうからして中世時代の住居址と思われる。

第2号住居址　（第4図，図版2）

調査地区の南側の位置に発見された住居址で，表土面より−40cm位下ったローム層を掘り込んで構築された隅丸方形プランを持つ竪穴住居址である。壁高は北，西20cm程。南，東は30cm程であった。壁の状態は北側は内弯，南側は内傾，東側は顕著に内弯，西壁は内弯，4壁はともに凹凸がはなはだしい。

北東の隅の壁周辺は周溝の上に貼床がしてあり，したがって新旧関係は周溝が古く，住居址が新しい。

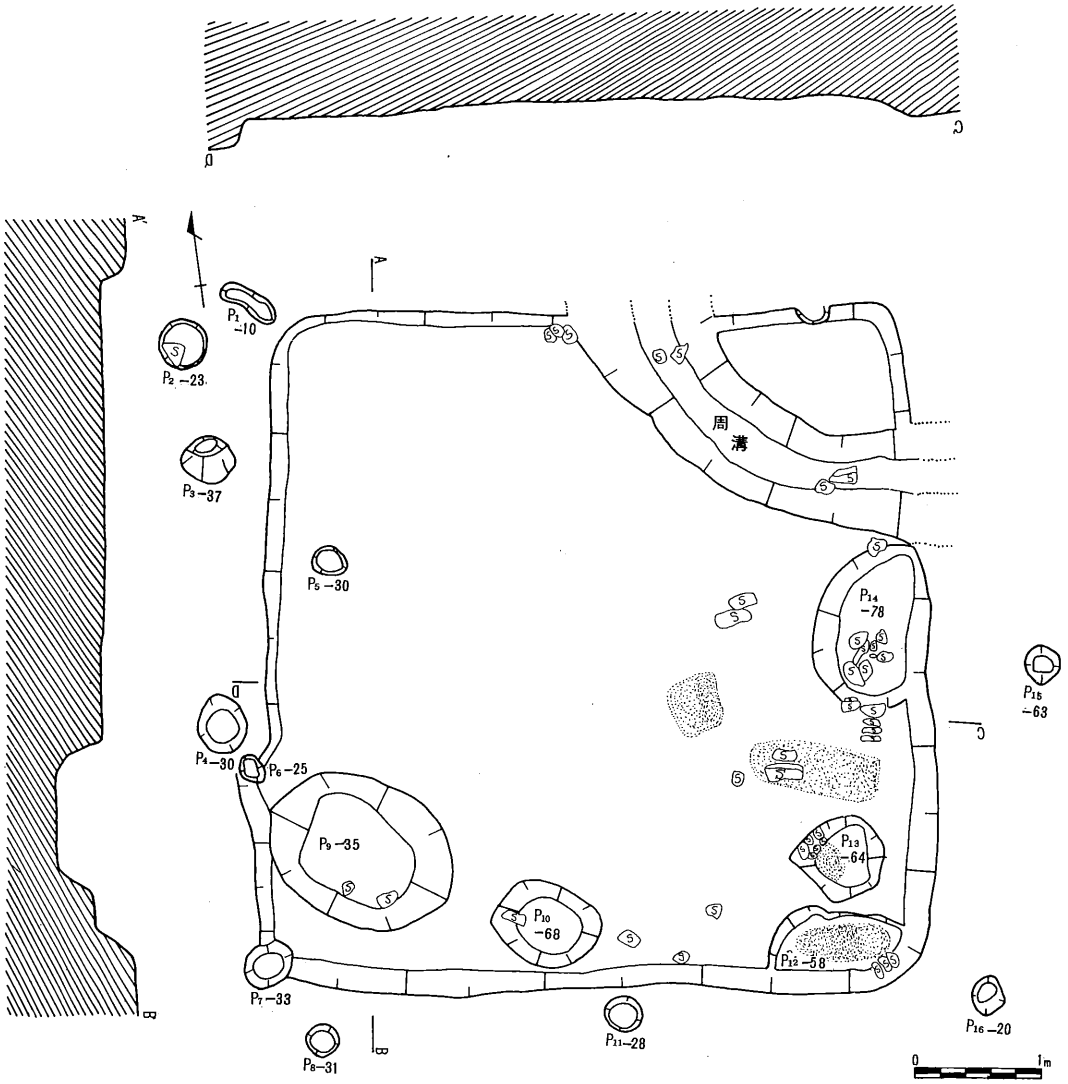
床面はローム層の硬いタタキがあり硬いタタキは床面積の$\frac{1}{10}$程度残存しているだけであった。おそらく，構築当時は全面にわたって存在していたと思われるが，桑畑の攪乱によって破壊されたのであり，大部分は軟弱であった。



第3図　第1号住居址実測図

カマドは東壁の中央部にあったと思われるが，ほとんどこわされてしまってはいるが，その面影を示すものとしては焼土や石が残存しているにすぎない。カマドに使用された石はホルンヘルスであった。

遺物は土師器，須恵器の完型品や破片で，奈良時代の住居址と思われる。北壁近くの床面より下に検出された周溝は弥生時代後期の方形周溝墓の一部と思われる。　（小池政美）



第４図　第２号住居址実測図

第２節　方形周溝墓

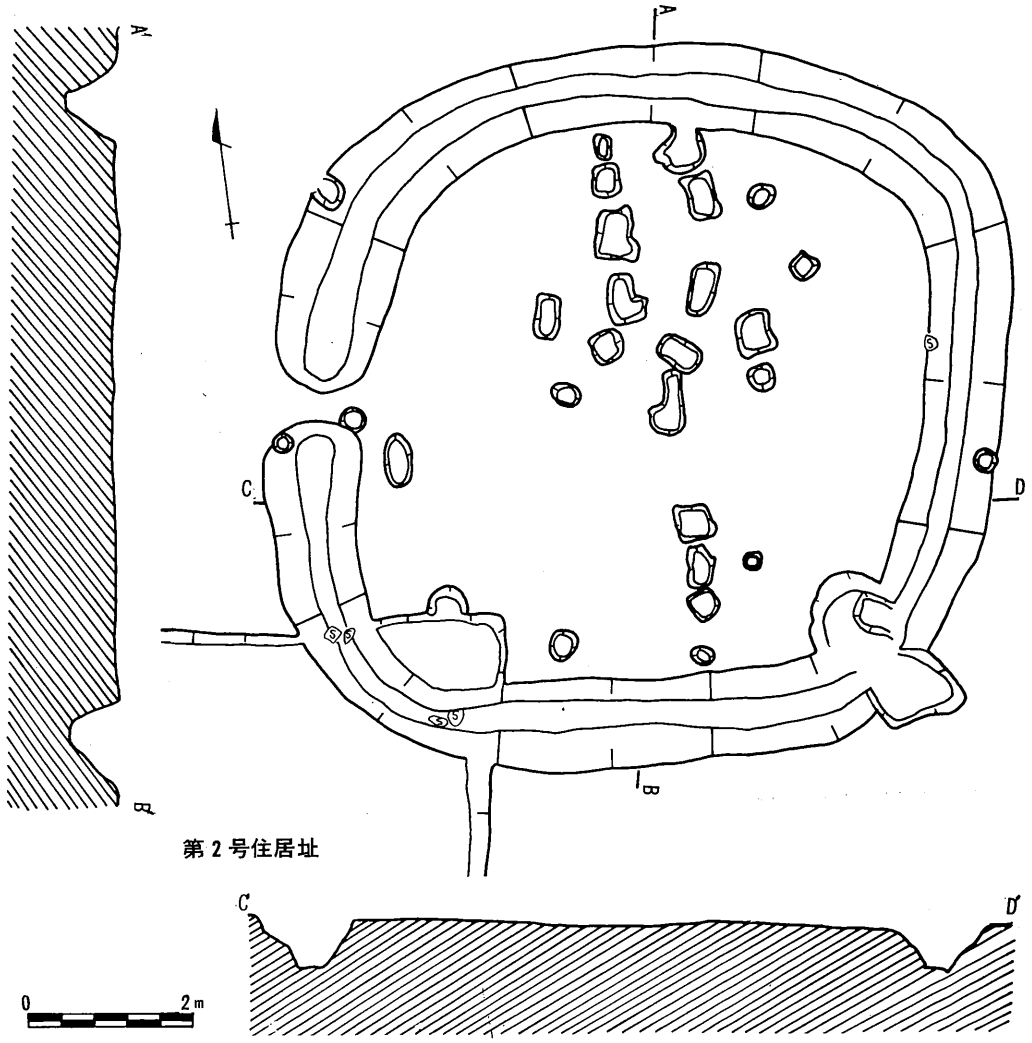
第１号方形周溝墓　（第５図，図版３）

本周溝墓は，東西の一隅で，第２号住居址に貼床されている。したがって，本周溝墓が古く，第２号住居址が新しい。周溝外縁から測定すると南北８ｍ90cm×東西９ｍ程の規模である。各溝の説明は方位によって，北溝，西溝，南溝，東溝と名付けておきたい。周溝は第２号住居址とほぼ同一レベルより掘り込んである。平面形態は，西側中央部が開口し，開口幅は外縁で，１ｍ，内縁で40cm程を測定できる。

北溝は長さ７ｍ50cm程，最大幅１ｍ10cm位，溝の深さは大般一定で80cm位を算出できた。断面は内傾が小さく，Ｕ字型を呈していた。溝内の堆積土層は複雑で，自然埋没による三角形状堆土の状態がみられた。溝はソフトローム層を切り込み，壁面の真中辺まではソフトローム層，それより下はハードローム層になっていた。したがって，底面もハードローム層よりつくられていた。

西壁は南側で第２号住居址の床面より下に溝が走っている。そのために，平面プラン南西隅には第２号住居址の壁面の一部が残存している。溝の長さは６ｍ50cm，最大幅１ｍ20cm，その断面は下端が小さくなるＵ字型を呈し，状態は北壁と大差はない。開口部より北側は幅広く１ｍ30cm，南側は狭く１ｍ位である。深さは一定であり，溝内の土層は複雑であり，溝底より約20cm位浮いて花崗岩の河原石が転落していた。

南壁は西側の一部分で第２号住居址の壁面の一角が残存していた。長さ約７ｍ，幅１ｍ20cm，溝



第５図　第１号方形周溝墓実測図

の深さは65cm位で，状態は前の２つと大般同様であるが，わずかに，東によるに従って浅くなっている。

東壁は，長さ７ｍ70cm，幅１ｍ，深さ60cm位であり，断面は下が小さくなるＵ字形であり，溝底の幅，深さともに前の３つよりも，狭く，また浅くなっていた。主体部は桑の攪乱等によって発見されなかった。遺物の出土は何もなかった。（小池政美）

第３節　土　坑

第１号土坑　（第６図，図版２）

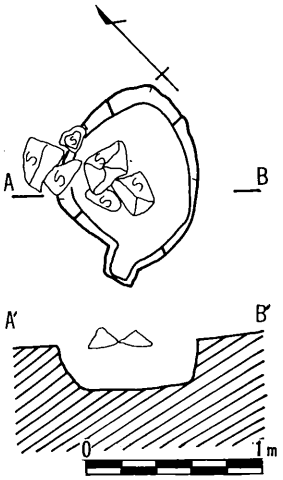
本土坑は第１号住居址の東側に位置し，表土面より－50cm位下ったローム層面を掘り込んだ土坑で，円形プランを呈し，南側は突起状になっている。壁高は全体的に20～25cmを算し，状態は内傾気味で，わずかなタタキや凹凸が認められた。床面はわずかな叩きで，ところどころに焼土と炭化物があった。土坑の中央部から壁面へかけて６個の石が存在し，それらは花崗岩やホルンヘルスで，炭化物が附着し，焼けていた。遺物の出土は何もなかった。

第２号土坑　（第７図）

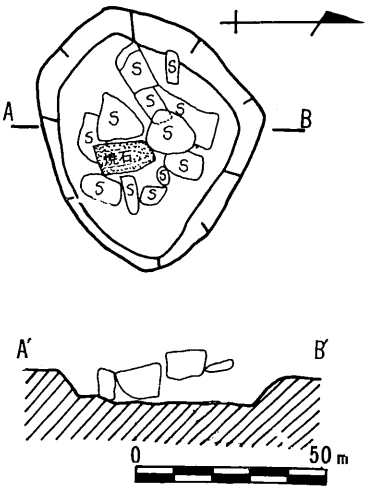
方形周溝墓の西側に位置し，その規模は南北57cm，東西69cm程を計り，幾分は角張っているが，全体的には円形状を成している。

北壁は南壁とともに内傾し，床面はかたいタタキで，わずかに凹凸があった。土坑の中央部に石が集中的にあつまっていた。それらの石に囲まれるようにして方形状の焼石が検出された。

覆土中より少量の炭化物と焼土の検出をみたが，遺物の出土は全くなかった。



第６図　第１号土坑実測図



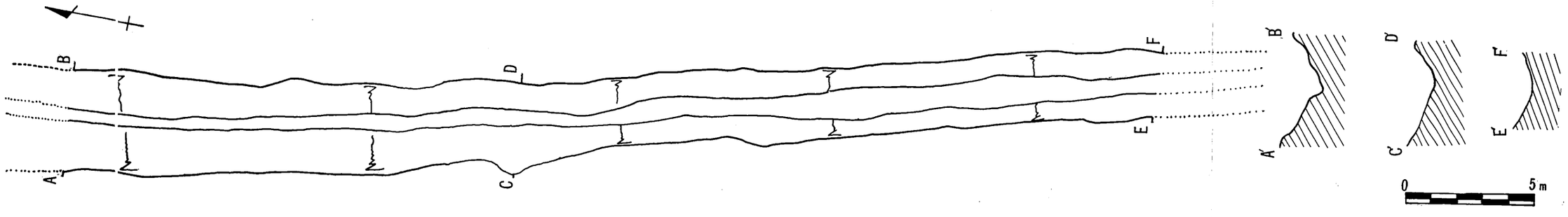
第７図　第２号土坑実測図

第４節　配石址

第１号配石址　（第８図，図版３）

発見された遺構のなかで最も北側にあり，大きさは南北65cm，東西７ｍ80cm程の範囲で広がり，右は床面に密着したり，10～20cm程浮いたものも含まれていた。その石は大部分花崗岩や変成岩よりなっていた。石のなかには焼けていたのもあった。遺物は何も出土しなかった。（小池政美）

第８図　第１号配石址実測図



第９図　第１号掘址実測図

第5節　堀　址

第1号堀址　（第9図，図版4）

本堀址の検出された位置は天竜川の段丘面，南側は犬田切川の段丘，北側は細窪と呼ばれている洞がある。近くには，丸山，内城，と呼ばれている城郭遺構がみられる。本堀址は，城郭遺構の末端に位置し，それを取り囲むようにしている。規模並びに，深さについては実測図を参照してもらうことにして，内部の様相について触れてみようと思います。堀は北側で，段丘崖へとつきでており，大般，直線状に南へと連なっている。幅は広いところで，4m，狭いところで，2m70cm程を計り，変化を混じえた堀となっている。深さは段丘端へ行く程，深くて，約2m，南側へ行くにしたがって緩傾斜で浅くなっている。前述した幅に関しては段丘の端へ行く程広くなっている。

溝の段面は，北側附近では壁面での凹凸が著しく，溝底は50cm程で狭く，さらに底部には無数の細礫が含まれていた。壁面上部はソフトローム層で，下部はハードローム層となっていた。さらに壁面の傾斜は北へ行く程に従って急傾斜をなしていた。この事実は防衛の何かを意味していることは疑う余知のないところと思われる。この事実を裏付けするかのごとくに，堀は段丘崖にも存在した痕跡を窺うことができた。

中央部附近の上部幅は3m，下部幅1m程で，同じく，上部はソフトローム層，下部はハードローム層より成り立ち，溝底には細礫が認められた。断面は両面ともに，緩傾斜をなしていた。

南部附近の上部幅は2m80cm，下部幅は70cm程であり，掘り込まれた面，及び溝底の状況，さらに断面等については中央部附近と大半同じであった。

堀址からは何も出土しなかったが，城郭の形態からして，中世時代のものと思われる。

さらにより確実なる決め手をつかむためには，堀の内部に構築された遺構の内容及び，それに伴ない出土遺物等を考えてみることも一種の手段と思われる。

築城方法として周辺の城郭との位置関係及び，距離関係との問題，さらに古字名の分類及び，古文献等を究明することも是非とも必要となってくる。

古文献として考えられるものとしては，小出文書（工藤文書）が唯一のものであり，このなかに細かな城郭の名称はあげてはないが，大きな部落名が記されてあり，そのなかには現在も使用されているものもみうけられる。

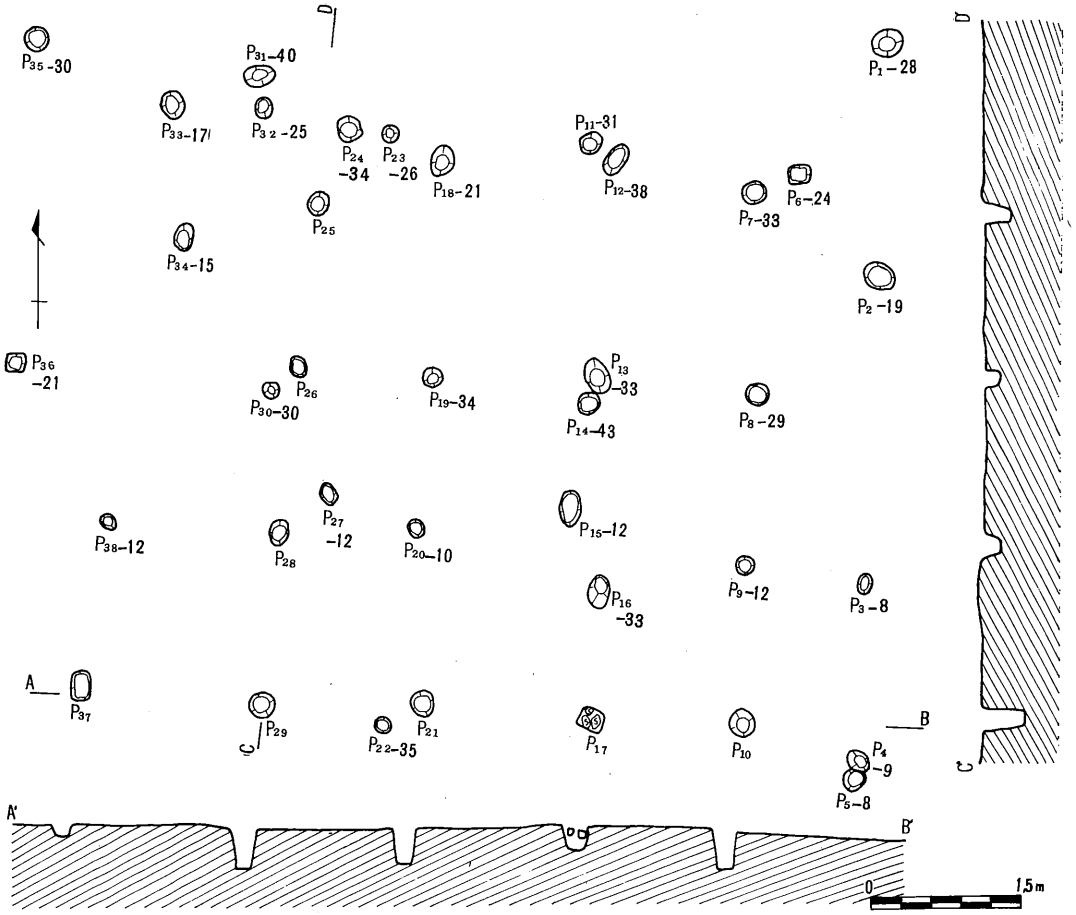
（小池政美）

第6節　柱　穴　群

第1号柱穴群　（第10図，図版4）

本柱穴群はソフトローム層面に38個検出された。その範囲は南北8m，東西9m位に存在していた。柱穴の深さは8cmから50cm位に含まれていた。配列状態が割合に整然としていたのは，P1，P2 P3，P4，P5，P7，P8，P9，P10，P18，P19，P20，P21，P25，P26，P28，P29，P35，P36，P37 とであった。柱穴のなかで角張ったものとしては，P36，P37，P6，長円形のものとしては，P3，P12，P15，P16，P18等であった。特殊なものとしてはP17のようになかに石をもったものも認められた。

柱穴群のなかからは，天目茶碗，黄瀬戸，志野等の中世陶器片が数片出土し，この遺構の築造年代を明確にさせてくれた。よって，本遺構は戦国時代のころのものと思われる。しかるに，これは前節で述べた堀との関連性を密接にしてくれることとして大いに注目に値する。

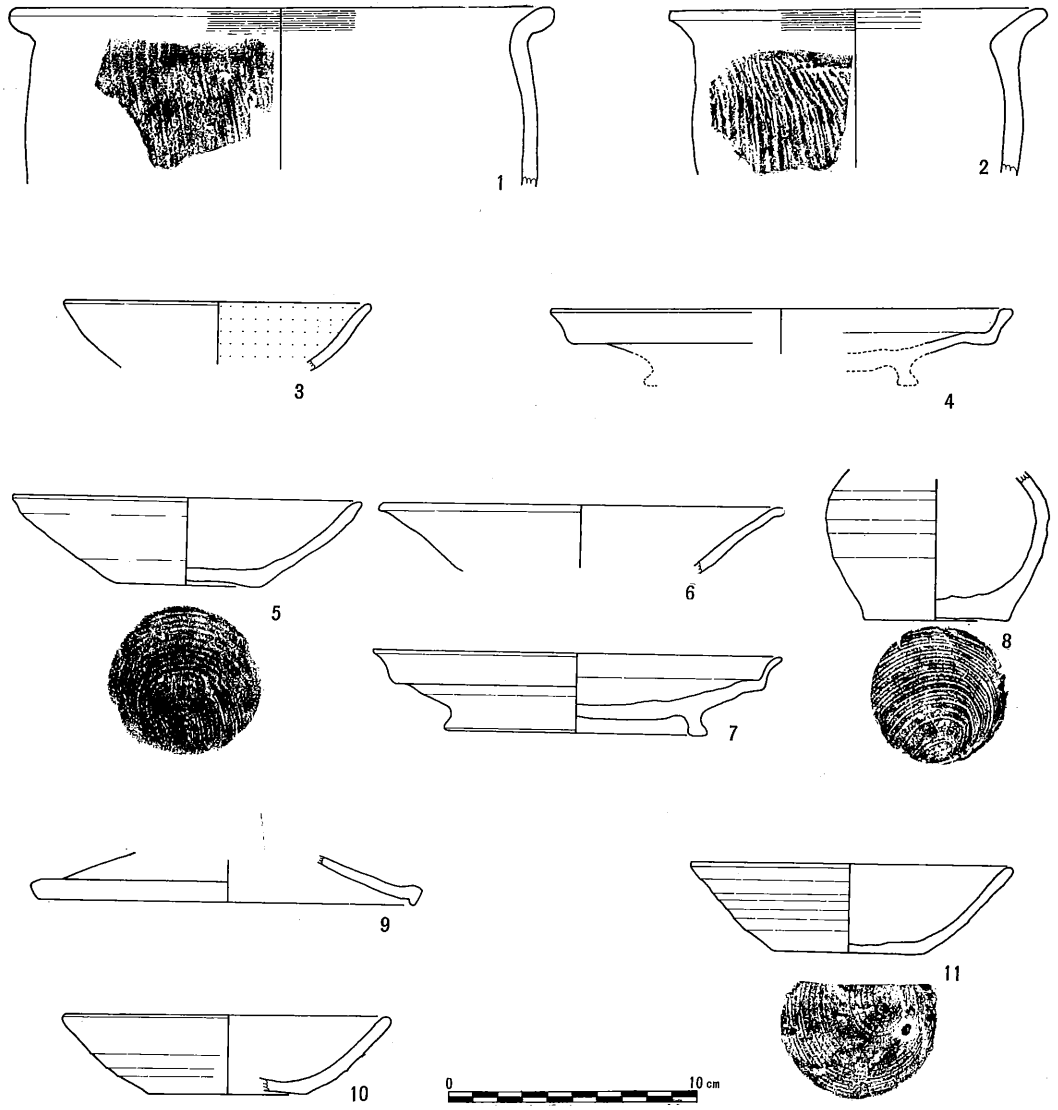


第10図　第1号柱穴群実測図

第Ⅳ章　遺　　物

第1節　第2号住居址出土土器

土師器，須恵器が出土しており，土師器の甕は胴長のもので，太い，粗いカキ目，細いカキ目痕を有するもの，杯は内黒のものが主であった。須恵器では杯，小壺，蓋等などが出土し，土師器に比較して出土量は多い。



第11図　第2号住居址出土土器実測図

土師器甕　〔第12図（1～2）〕

（1～2）は外面赤褐色，内面赤褐色，胎土には砂粒や雲母が含まれ，焼成は良好である。口縁部は大きく『く』の字形に外反し，割合にシャープな曲線を描く，口縁部には水平方向に内，外面ともに細線が走り，頸部から胴部にかけて，太く，粗いカキ目痕が縦方向に施されている。

土師器杯　〔第12図(3)〕

（3）は中形の土師器杯で口縁部のみの残欠品，内面黒色である。

須恵器段皿　〔第12図(4，7)〕

（4）は灰褐色を成し，砂粒を含む，胎土，焼成ともに良好である。高台は欠損している。(7)は灰褐色を成し，大きな砂粒を含み，胎土，焼成ともに良好であった。高台の断面は台形を呈している。

須恵器杯　〔第12図（5～6），(10～11)〕

（5）は床面出土，色調は内外面ともに灰白色を呈し，小長石を微量含む胎土，中形の杯で口径は14cmを計る。口縁はやや外反し，底部は糸切りである。6は床面出土，色調は外面青灰色，内面灰白色を呈す。小石粒を含み，やや粗雑な胎土，やや大形で口径は16.3cmを計り，口縁は外にたれ，気味であり，底部を欠いている。(10) は内外面ともに色調は青灰色を呈し，小石粒を含み，焼成は良好，ロクロの跡が顕著であった。(11) は内外面ともに色調は青灰色を呈し，小石粒を多量に含み焼成は良好，ロクロの跡が顕著で，底部は糸切りである。

須恵器小壺　〔第12図（8）〕

8は床面出土，内外面ともに色調は青灰色を呈し，小石粒を少量含み，焼成は良好，ロクロの跡が顕著で，底部は糸切りである。破片上部には自然釉が若干見られる。

須恵器蓋　〔第12図（9）〕

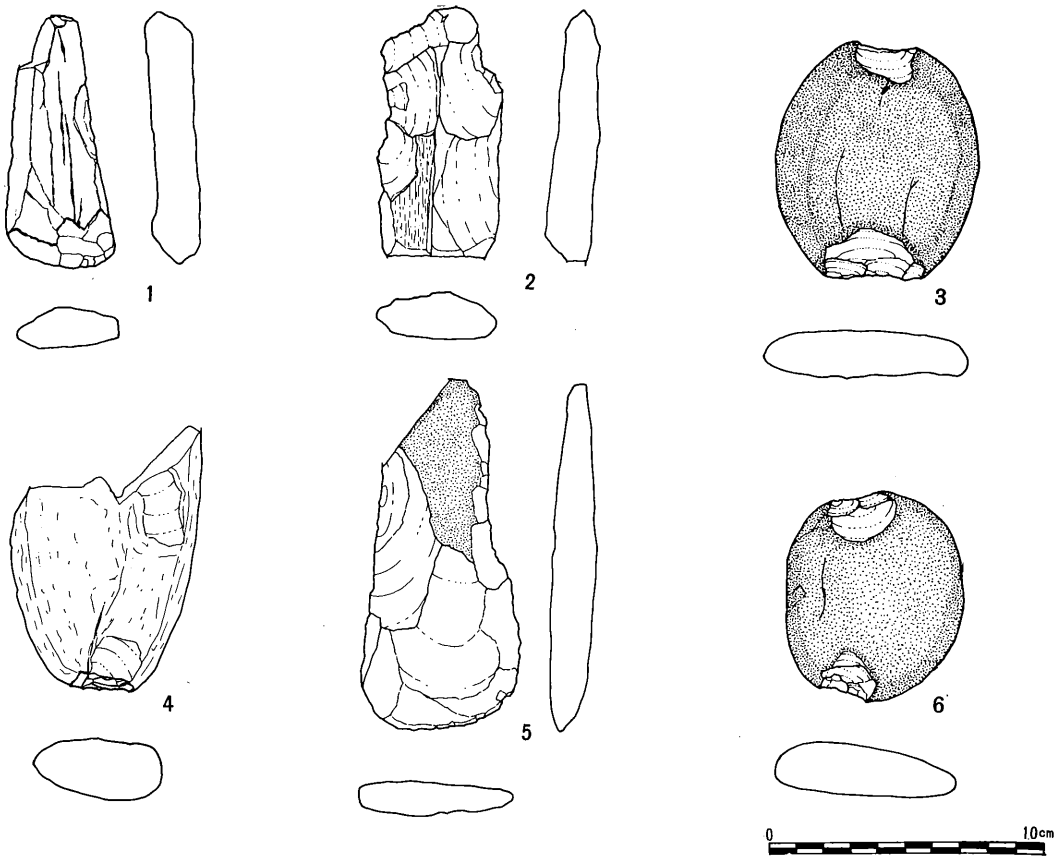
9は色調が内外面で，青灰色を呈し，焼成は良好であり，少量の小石粒を含む。ところどころに自然釉の跡が残存している。

第2節　石　器

（1～2，5）は打製石斧であり，（1）は砂岩系の石質で，片面は欠損し，調整は良くない。(2) の石質は1と同様で，周囲の調整は良好であり，上部と下部は欠損している。(5) は硬砂岩質の石材で，典型的な撥形を呈し，上部は欠損しており，上半部は大部分自然面を残している。(4) は乳棒状の石斧で，上部は欠損し，刃部の頭はわずかに打撃の痕が認められた。石質は硬砂岩を用いてある。

（3，6）は硬砂岩を用いた石錘であり，円礫の上端と下端を打ち欠いて調整し，その部分は割合に良好であった。

（小池政美）



第12図　石器実測図

第V章　ま　と　め

天竜川の右岸第二段丘面の南小出南原遺跡の東端地区を約5,000㎡を発掘調査した。

それぞれの遺構は，第Ⅲ章まで詳述した通りであるが，これを簡潔に述べれば次のようになる。

① 弥生時代後期に所属する方形周溝墓　1基

② 奈良時代に所属する竪穴住居址　1軒

③ 中世時代に所属する竪穴住居址　1軒

④ 中世時代の堀址　1基

⑤ 中世時代の柱穴群　1基

⑥ 時期不詳の土坑　2基

⑦ 時期不詳の配石址　1基

ここで発掘時の所見に基づき考察を加えてみた。

1．弥生時代後期の遺構について

台地のほぼ中央部に発見された弥生後期の方形周溝墓は伊那市においては初見のものである。規模は南北8ｍ90cm，東西9ｍの規模をもっており，開口部は西側にあり，南西の一隅の周溝は貼床

され，第２号住居址となり，その東側は第２号住居址に切られている。

いままでに長野県で発見された方形周溝墓や円形周溝墓の遺跡名を列記してみると次のようになる。観現堂前，滝沢井尻，角田原１，角田原２，天伯Ａ，石子原１，石子原２，石子原３，帰牛原南１，帰牛原南２，帰牛原南３，帰牛原南４，帰牛原南５，田村原１，田村原３，清水１，清水２，さつみ，帰牛原１，帰牛原２，出原西部，的場１，的場２，的場３，田村原２，天伯Ｂ，諏訪本城，塩尻焼町，須多ケ峯１号，須多ケ峯２号，安源寺22号，安源寺23号，南大原，東長峯，照丘，平紫平１号，平紫平２号，平紫平３号，平紫平４号（註１）宮田村駒ケ原南（註２）

２．奈良時代の遺構について

台地の中央部，方形周溝墓に接して発見された竪穴住居址で，ただ１軒検出されたのみであった。隅丸方形プランを持ち，カマドは東壁の中央部にあり，石組粘土カマドの様相を成していた。この時期の集落としては伊那市では福島遺跡をあげることができよう。（註３）

３．中世時代の遺構について

南北３ｍ30㎝，東西１ｍ60㎝の竪穴住居址であり，遺物の出土は何もなかったが住居址の規模から想像して，いままでに発見していたのと類似しているので，一応，本時代の遺構として考えてみた。

次に同時代の堀址について，幅，及び規模等，いろいろ大きさについての項目は実測図を参照にしていただきたい。

この堀址の存在を考えるに周囲の城郭遺構との関連性について充分なる検討を考えてみる必要をを重要視しなければならない。

柱穴群についてはこれも出土遺物からして中世時代の遺構であることは相違なく，また，中世時代のなかでも，割合に確実なる時期決定ができるものと思われる。

時期不詳の遺構について

時期不詳なために前節で述べた通りぐらいにとどめておきたい。

本調査報告を終わるにあたり，この調査に種々の御指導，御配意をいただいた県教育委員会，財政面に心配していただいたタカノ株式会社，また，何かの面で御協力下さった伊那市教育委員会，献身的に報告書完成まで御協力いただいた調査員各位に篤くお礼申しあげる次第であります。

（小池政美）

参考文献

註１

日本原初考

古諏訪の祭祀と氏族　古部族研究会編

宮坂光昭

古墳の変遷からみた古氏族の動向

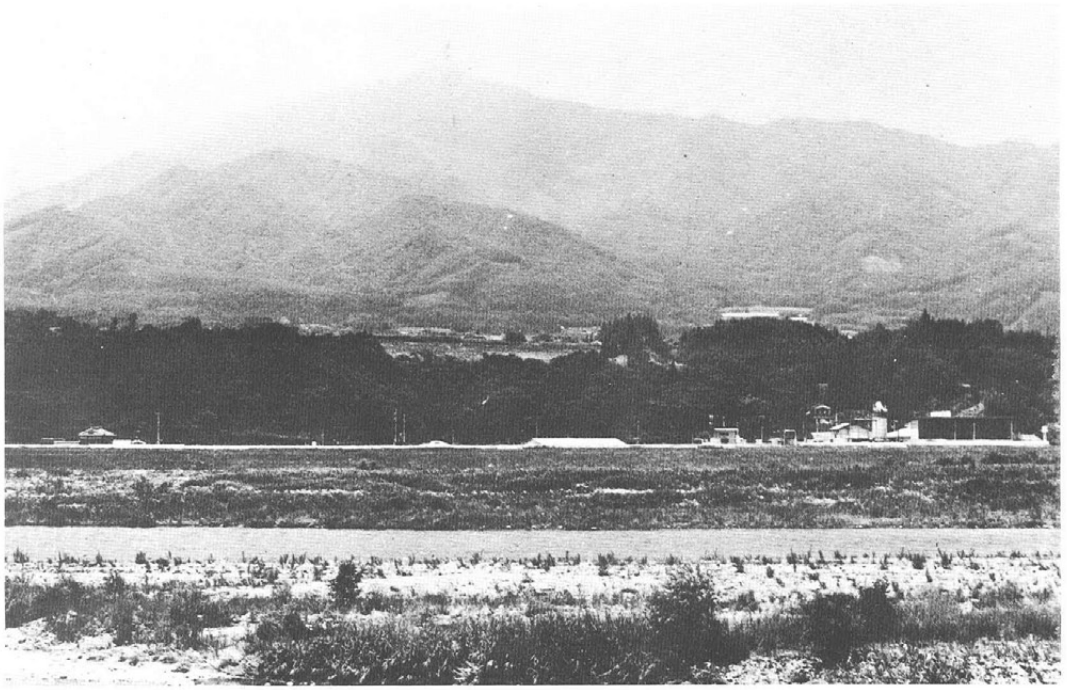
註２　昭和52年夏実施

方形周溝墓８基発見報告書は近日中に刊行予定

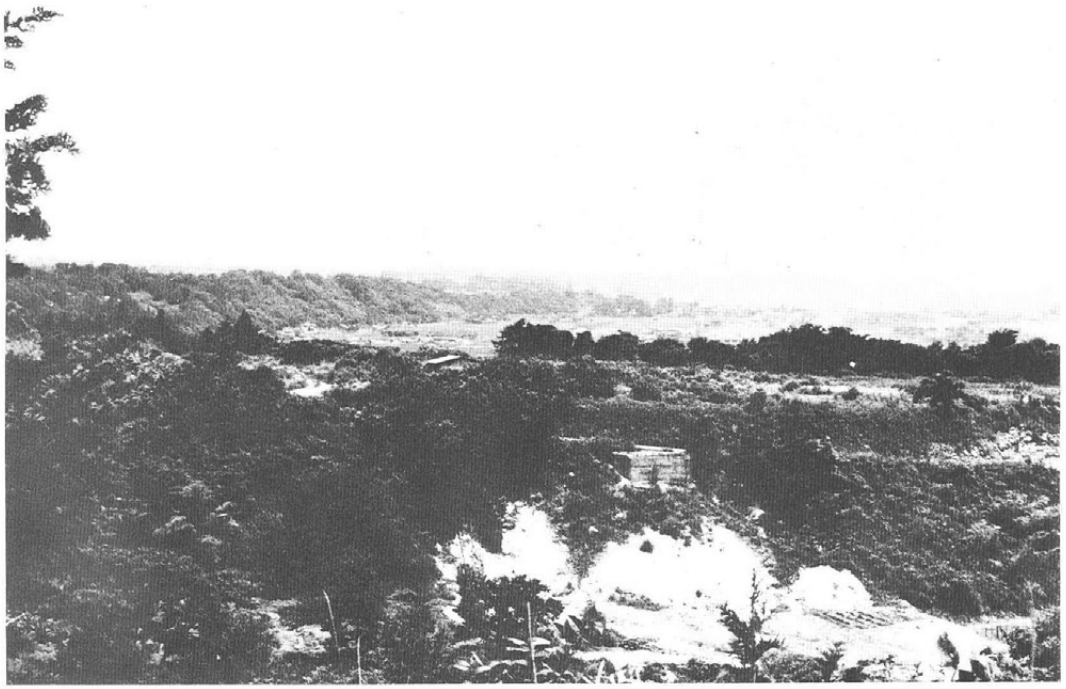
註３　大川　清（福島遺跡）

伊那市教育委員会　　昭和42年

図　　版

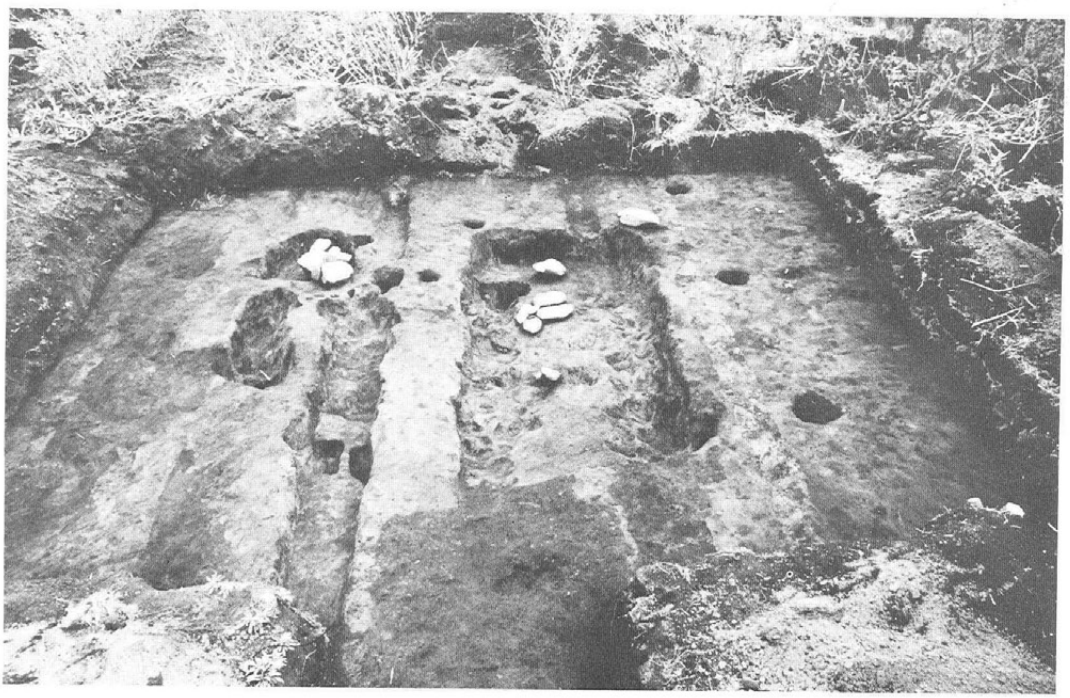


遺跡地を天竜川対岸より眺む

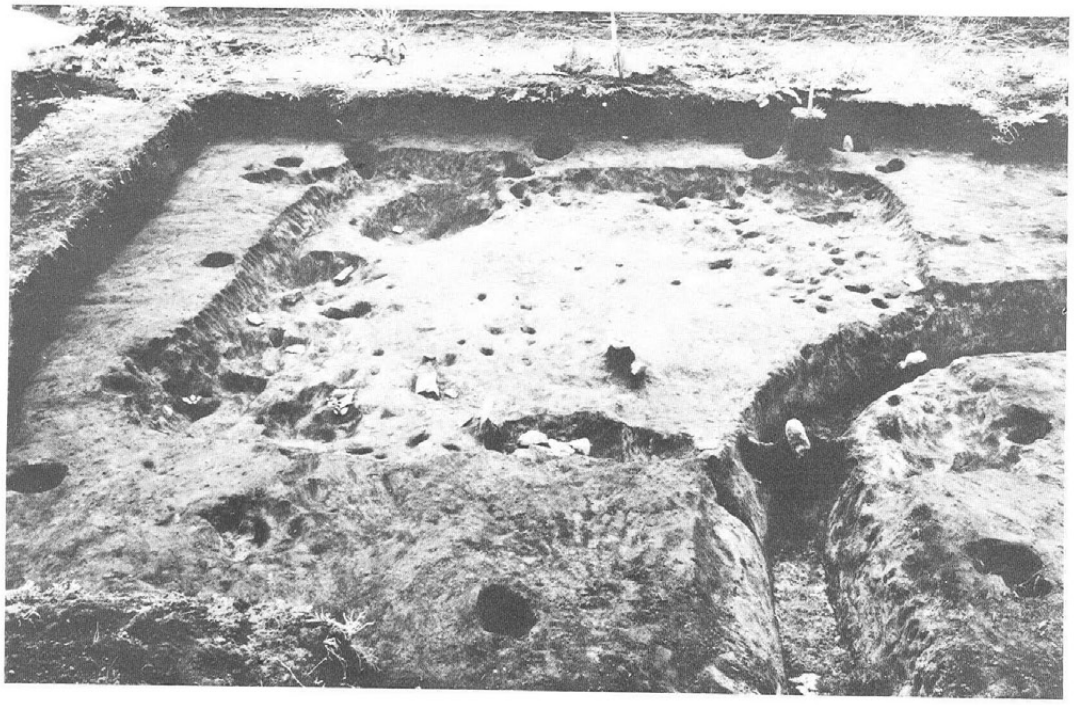


遺跡地を犬田切川対岸より眺む

図版1　遺　跡　全　景

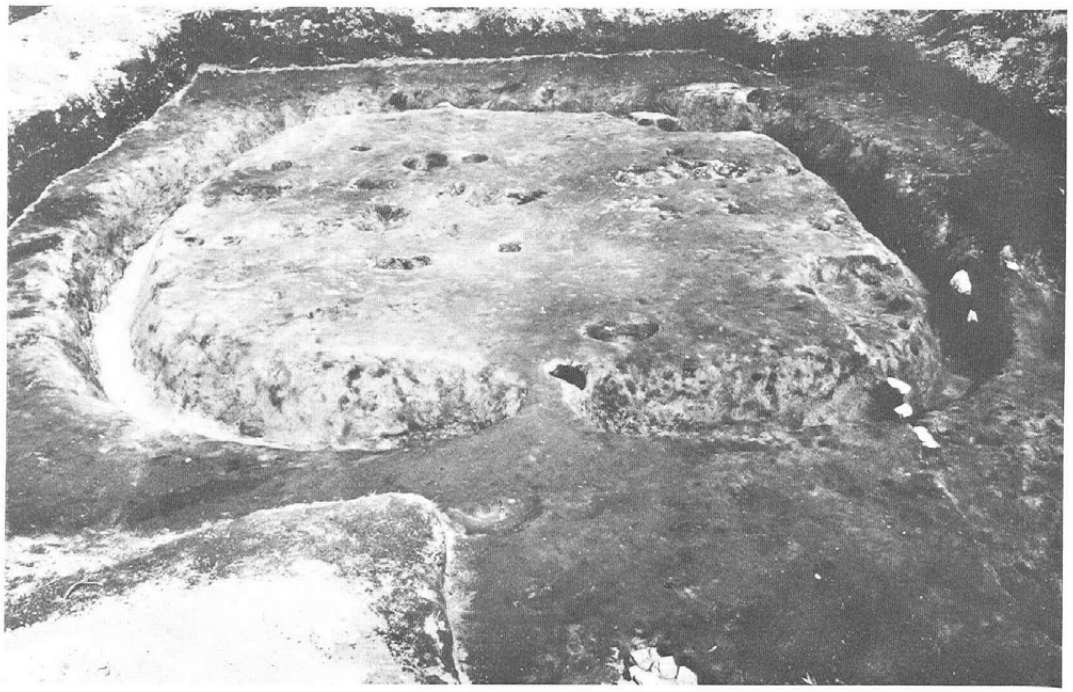


第１号住居址及び第１号土坑

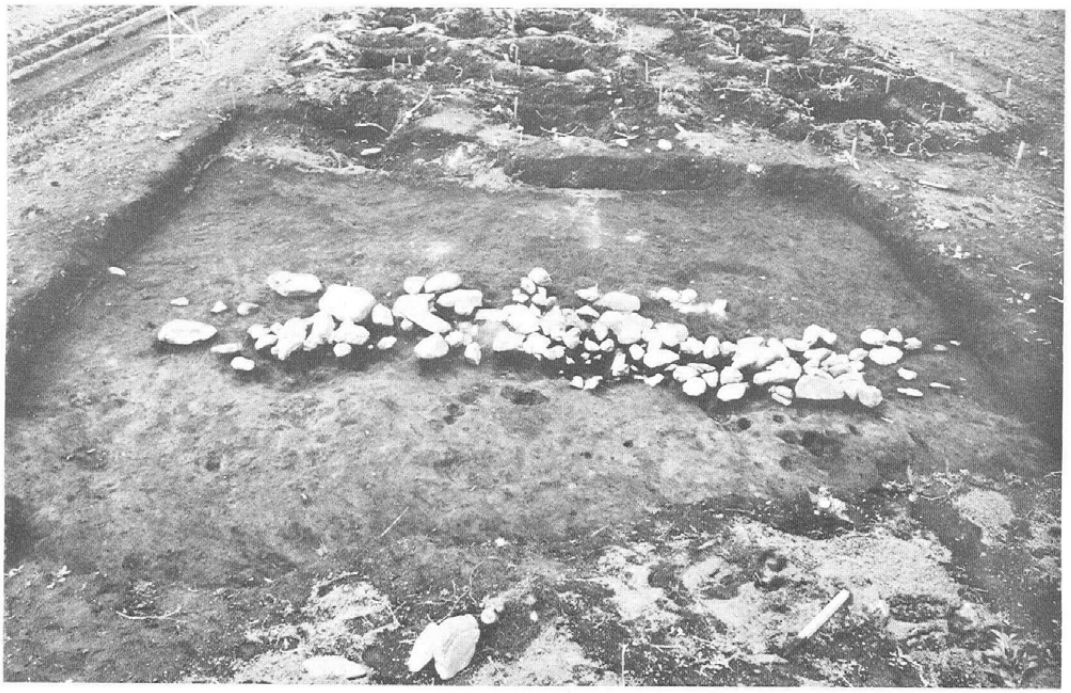


第２号住居址

図版２　遺　　構



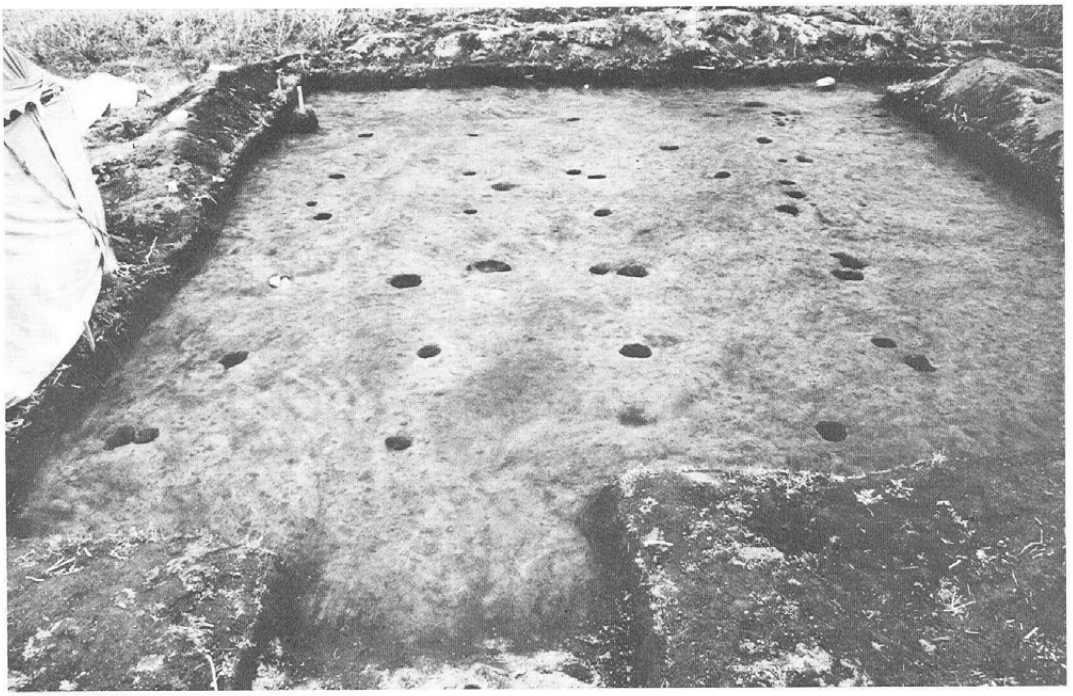
第１号方形周溝墓



第１号配石址

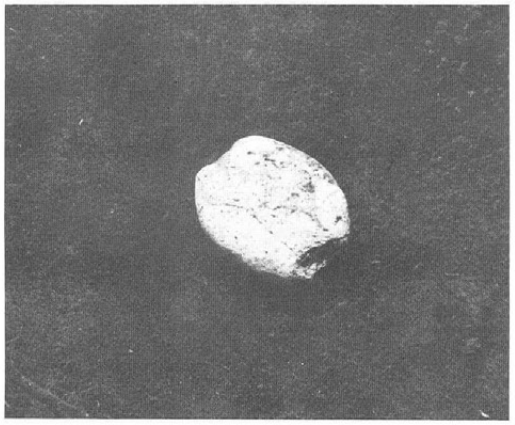
図版３　遺　　構

第１号堀址

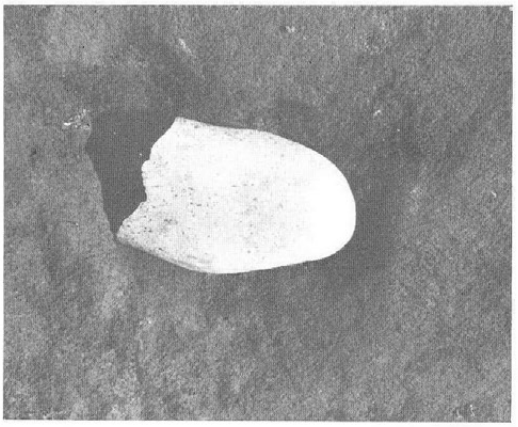


第１号柱穴群

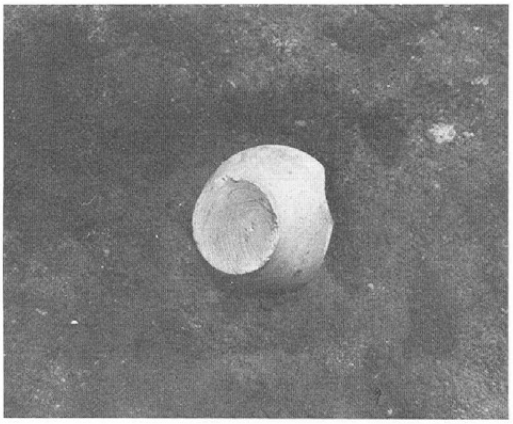
図版４　遺　　構



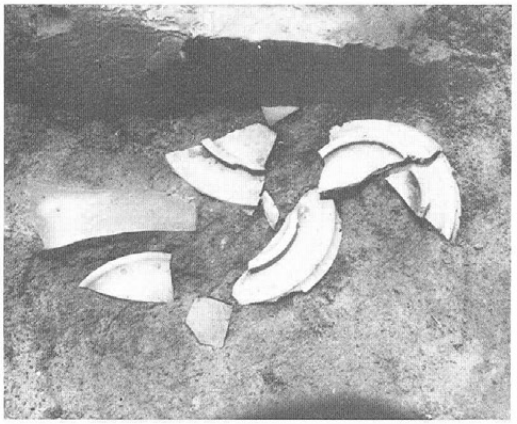
石器出土状況



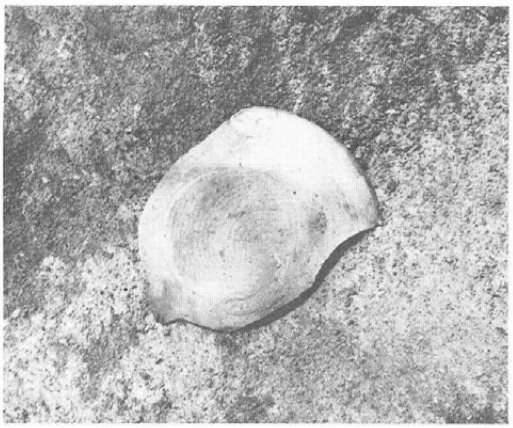
石器出土状況



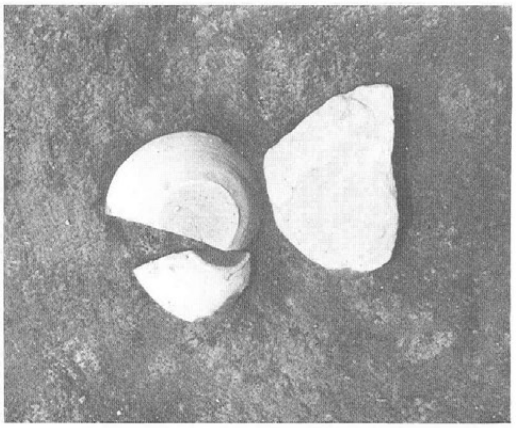
土器出土状況



土器出土状況



土器出土状況



土器出土状況

図版 5　　遺物出土状況

南小出南原遺跡

緊急発掘調査報告

昭和53年7月15日　印刷
昭和53年7月20日　発行

発行所　長野県伊那市教育委員会
印刷所　下諏訪町広瀬町
オノウエ印刷㈱